

日本語研修で日露友好の試みに挑戦する日本語学校

北方領土返還の厳しさ示す「ビザなし交流」日露先人の努力と実績

日本の少子化が進行するに従い、海外留学生を歓迎する空気が広がっている。日本はアメリカのように移民をどんどん受入れ、国家の隆盛をもたらす存在として歓迎するレベルにはまだ達してはいない。しかし、海外から働きに来ている人々や学生に対する市民の視線も年々温かくなり、日本語学校に対する注目度も年々高まっている。また、日本語学校の方でも、様々な工夫・努力を加えて、母国と日本をつなぐ架け橋となる留学生の受け入れと指導を工夫し、挑戦するなど、日々汗をかいている。こうした学校の中には、ロシアとの友好親善の絆を築く一助として、北方四島に住むロシアの人々を受け入れ、日本語習得のための 1 カ月間の短期研修に応じている日本語学校もある。

◆北方四島ロシア人の日本語習得受入事業に取り組む I A Y 日本語学校

北海道は札幌市の大通公園近くにある「I A Y 日本語学校」(対木正文学院長)と日本語教師養成学校の「I A Y インターナショナルアカデミー」だ。学院長の対木先生は、北海道大学の理学部卒業後、ドイツのベルリン自由大学で学んだ経営者だが、「百聞は一見に如かず」を座右の銘にして、自らチャレンジする人生を歩んできた。1972 年開催の第 11 回札幌オリンピック冬季大会では、ドイツ語の公式通訳を務めた。

対木先生が日本語教育を始めたのは、46 年前の 1970 年。札幌五輪支援に必要な通訳を養成するために、世界から数十名の外国人講師を海外から招いた時、未経験の異文化の下で苦勞している講師の先生方を見て、「生活支援のためにと日本語の指導と文化・習慣の紹介を始めた」のが、日本語学校を創立する動機だった。紆余曲折はあったものの、日本の国際化と共に増えた外国人を迎えて学校経営は軌道に乗った。最近では経済産業省委託事業のコンソーシアムとして日本での就職を目指す留学生のための「ビジネス日本語」や、文化庁委託の「生活者としての外国人に対する日本語教育」支援などにも挑戦した。

今回も I A Y 日本語学校が取り組んだのは、北方四島(択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島)のロシア住民を受け入れての「日本語習得受入事業」だ。この事業は、内閣府北方対策本部の補助のもと、社団法人「北方領土復帰期成同盟」に設置された「北方四島交流北海道推進委員会」と独立行政法人「北方領土問題対

策協会」が行っている「北方四島交流受入事業」の一つだ。平成27年度の「第4回四島交流受入事業」に当たり、日本語習得を目的としている。

◆ゴルバチョフ大統領が新旧四島住民に道を拓いた日露「ビザなし交流」

北方四島は3代から6代に渡り、漁業その他の開拓に苦勞した父祖の地

この事業も日露両国間の「ビザなし交流」の一環だが、「ビザなし交流」は1992年・平成4年に始まった。1991・平成3年4月、ゴルバチョフ大統領が来日の際に、ソ連側から「日本国民と北方四島在住のソ連人との交流の拡大および日本国民による北方四島への旅券（パスポート）・査証（ビザ）なしの訪問」が提案されたのがきっかけ。「領土問題（平和条約締結問題）解決までの間、相互理解の増進を図り、領土問題の解決に寄与すること」を目的として、翌1992年・平成4年から「ビザなし交流」が始まった。今年で24年目だ。

こうした形式が必要なのは、日本とロシアの間で、未だ北方領土問題が、未解決だからだ。交流事業には日本国民が北方四島を訪れる「訪問事業」と、北方四島のロシア人住民が日本を訪問する「受入事業」がある。IAY日本語学校が行なったのは後者の「受入事業」だ。当然、今回、国後島からやってきたサイコ・アレクサンドル・ヴィクトロヴィチを団長とする19人のロシア人男女一行は、すべて北方四島出身者だ。

改めて北方四島を紹介しよう。根室市に近接する歯舞群島（はぼまいぐんとう）、色丹島（しこたんとう）、国後島（くなしりとう）、択捉島（えとろふとう）の4島を指す。歯舞群島は、北海道根室半島の納沙布岬（のさっぷみさき）の沖合わせか3.7kmから北東方に点在する小島群だ。最も遠方に位置する択捉島は、北東方144.5kmに位置し、4島の総面積は5003.1km²、千葉県並の規模がある。四島は、父子相続して三代ないし六代も漁業その他の業を営み、開拓した父祖の地だ。島々は自然に恵まれ、周辺の海は暖流の日本海流（黒潮）と寒流の千島海流（親潮）が交わる水産資源豊富な世界有数の漁場だ。

◆23年間328回の交流訪問事業で1万2439人の日本人が四島を訪問

222回の交流受入事業では8859人の四島住民ロシア人が日本を訪問

その四島から来日した一行は、昨年8月10日に根室港に入港、9月11日根室港を出航予定と1カ月余の研修スケジュールだ。札幌市内のIAY日本語学校での日程は、開校式の8月10日から閉講式の9月8日までの約1カ月。日本語習得研修の合間、日曜日は休みだが、毎週土曜日には交流プログラムが盛りだくさんで、書道、作陶、着物の着付けなど日本文化体験や、エアロビクスなどのプログラムが用意された。家庭訪問も行われた。大学生など若い世代や札幌に拠点を置く民間企業などとの幅広い市民交流の機会も設けられた。

この交流事業に触れておくと、平成27年度も6回の受入事業計画が行なわれた。1回目は5月（東京都・青少年交流、50名）、2回目は6月（札幌市・根室市、青少年交流、50名）。3回目、6月（根室市、ファミリー交流、70名）。5回目9月（旭川市、根室市、一般交流、60名）が行なわれたが、最後の6回目の10月（秋田県、一般交流）は悪天候のために中止。専門家（動・植物学者、地震・火山、歴史文化）の交流も3回計15名、医師・看護師らの研修が1回3名一と総計267人の四島住民が日本を訪れた。

今回のような「ビザなし交流」は、戦前、四島に住んでいた日本人らの「北方四島交流訪問事業」では、平成4年から平成27年までの23年間に328回の訪問事業が行なわれ、1万2439人の日本人が四島を訪問した。また、昨年10月までに222回の「北方四島交流受入事業」が実施され、8859人の四島に住むロシアの人々を受け入れてきた。交流事業が目指す「北方四島返還」という北方領土問題の解決がいかに難しいか、実に息の長い、根気のいる困難な事業かということが、このおびただしい「ビザなし交流の実績」を見ても良くわかる。改めて訪問と受入れを担った日露先人の努力が偲ばれる。

◆北方四島ロシア人の日本人、日本文化への受け止め方は実に多種多様

領土問題や日露関係の受け止め方も多彩、日露交流積み重ねの重要性を実感

肝腎のロシア人の日本語研修だが、IAY日本語学校の佐藤直子教務主任が色々と説明してくれた。また、日本語習得研修がどんな様子か、またどんな感想を持たれたのか、四島住民に感想を聞いてみた。今回の一行は、国後島から7人、色丹島から5人、択捉島から7人で、歯舞群島からは参加がなかった。

19人は、同校では3クラスに分けられた。日本語の文字が全くわからない人は初心者向けのAクラスで、平仮名、片仮名から教える。日本語初級、中級の本が読め、中級卒業間近の人々を対象にした上級のCクラスは、ある程度日本語の基礎ができている人が対象だ。Bクラスは丁度その中間。今回の一行の中には日本大好きで9回も来ている人もいて、そうした人々はCクラスだ。

Aクラスは初級会話だ。「一緒にテニスをしませんか？」と先生が学生に聞くと「ええ、しましょう」と、皆、声に出して返事を返していた。

Bクラスでは、「テニスの後で、コーヒーを飲んだ。それから晩御飯を食べた。それから家へ帰った」と、Aクラスより、やや複雑な会話のやりとりだった。

Cクラスは男女とも年配の方が多い。CDを使っての授業で、東日本大震災のニュース速報を流していた。「台風、洪水の時はどうしますか？」と先生が尋ねると、受講生らは「家の上に逃げます」「泳ぎます」と銘々が答えていた。

授業が終わって受講生にいろいろ聞いてみた。ゴルスキー・ニコライ・イヴァノヴィチさん（67歳）は画家だ。今回の訪日の動機を伺うと「私は16歳の時

に『ラジオ』という雑誌を読んでいたのです。すると、ラジカセの写真が載っていた。その『マエストロ40』を買い求めて聞くと、とても感動して『日本に行きたい』と思ったのが最初の動機です。30年前に3週間、日本語を学びに来ました。以来、たびたび日本を訪れていますが、日本は便利なもの多くて、美意識が遺伝的に高いですね」と心から日本が大好きな様子だった。

また、今の日露関係についても尋ねると、イヴァノヴィチさんは「どんなに小さなテーマでも、戦争に訴えるよりは、悪い平和の方がまし。良い戦争はないですよ」と、島の芸術家らしい、いかにも深淵な答えが返ってきた。

また、6回も日本に来ているというサイコ・アレクサンドル・ヴィクトロヴィチさん（62歳）はパン屋さんだ。訪日の動機について伺うと「私は日本人、日本の文化が大好きです。札幌には4回も来ていますが、綺麗な町ですね」と言った後、「私は話すよりも読む方が好きなのです。日本の昔話とか、童話とかを読んでいると、日本人の気持ちが分かります」と語る。また、北方領土問題を尋ねると「歴史的に複雑で一言では言えません。ロシアのままだと、日本人は去って行く。その逆ならば、我々が去っていく。解決方法は解りません!」とお答え。領土問題解決の難しさは、ロシア人から見ても日本人と同様だ。

マルチェミャノヴァ・スヴェトラナ・エヴゲーニエヴナさんは、村上春樹、吉本ばなな、川端康成の小説を読む日本文学ファン。領土問題については「アメリカのプレッシャーが無ければ、ロシアと日本だけならば、話ができるのでは」と、今の国際環境が、領土問題の解決を妨げているとの見方を示した。

◆ニコラエヴィチさん「日露の将来は、両国の友情無しには考えられません」

ヴラジーミロヴナさん「交流積み重ねで理解が深まり、壁がとれてくと実感」

受講生の職業は実に多彩だ。日程の関係から会社員や公務員は来られないからだろうか。クリンスキー・ゲオルギ・ニコラエヴィチさん（61歳）は、動物や魚を求めて狩りのガイドをしている。ニコラエヴィチさんも日本文学が好きで勉強しているロシア人だ。村上春樹や芥川龍之介など日本の文学作品は電子リーダーでたくさん読んでいるという。「日本文学がロシア文学と違うところは、日本の作品は、ストーリーの流れに違いがある。作品が完全に終わることがない。読者である自分の頭の中で想像して完成させるところが面白い」と、分析してくれた。芥川作品をたくさん読んだ影響かもしれない。

日露関係と領土問題についても伺うと、ニコラエヴィチさんは「日露の将来は、両国の友情無しには考えられません。日本もロシアも、それぞれ中国とアメリカという他国からの危険性があります。ですから、ロシアと日本はもっと親しくならなければならない。私が見ている限りでは、ふつうの人々の関係はいい方ですね。お互いに嫌う理由はないですよ」といかにも率直に語る。

その上で、ニコラエヴィチさんは「前は、四島は『レンタルでもいいか』と思っていましたが、基地は残し、米軍と共存している沖縄のように、ロシア人と日本人の日露共同生活でもいいのではと思います。重要なポイントだけは、返す必要はないと思っています」と自分なりのアイデアを語ってくれた。

今回の交流事業と日本語習得研修についても受講生に聞いてみた。日本人の観光ガイドも務めているお嬢さんのオレニコヴァ・スヴェトラーナ・ヴラジーミロヴナさん（25歳）は「こういう交流の積み重ねが大切だ、ということが実感できます。プログラムを通してお手伝いさせてもらってとても大事です。授業はリピーターも結構多いです。両国民の理解が深まり、壁が無くなっていることを感じますよ」と、日本語習得事業の意義を讃えていた。しかし、研修日程の取り方については「日本語研修は、1週間や2週間とか短期集中でやる方が良いでしょう。今のやり方では緊張感が無いです」と提案する。

北方四島のロシア人の、日本や日本人、日本文化への受け止め方は、実に多種多様だ。また、領土問題や日露関係についての受け止め方も一人、一人違う。改めて交流事業と日露交流の対話の積み重ねの大事さを実感した。

◆ 『人間の共同の道具』としての言語（米言語学者のS・I・ハヤカワ博士）を扱う日本語学校の使命の重要性を日本語習得研修で知る

ところで、ロシアの対極にある米国に、サミュエル・イチエ・ハヤカワ（S・I・ハヤカワ、Samuel・Ichiye・Hayakawa）という言語学者がいる。もう故人だが、サンフランシスコ州立大学で教授と学長を務めた後、上院議員（カリフォルニア州選出、共和党）となった。「言語論」や「意味論」と呼ばれる分野を実証的に分析し、心理学的側面から言語行動の研究を行ったことで知られる。1949年に主著の1つである古典的名著『Language in Thought and Action』（『思考と行動における言語』1965年・岩波現代叢書）を著した。

この本は、言語学習の重要性について序文にこう記している。

「ハッキリと考えることを学び、より有効に話し・書くことを学び、より高い理解をもって聞き・読む仕方を学ぶ—こういったことこそ、言語学習の目標である。この本は、これらの伝統的な目標に、現代の意味論の方法で迫る。……（言語機能に関する）一般意味論の土台にある倫理的仮説は、『協同は衝突よりも好ましい』であり、人間の協同の道具としての言語を活用すべきである」

IAY日本語学校が試みた「日本語習得研修」は、まさにこうした言語活動のささやかな試みの一つである。「人間の協同の道具」としての言語だ。ハヤカワ博士の本に学ぶならば、この分野を扱う日本語学校は、他国の学生や社会人を導く機関として、大いなる使命を負っているといえる。

『思考と行動における言語』の第1部、言語の機能の中の「1、言語と生存」

ではこうも述べている。「人間は先人の知恵である膨大な知識を蓄積し、無料の贈り物として後世に伝えている。文化的・知的協同は、人間生活の大原則である。表面的には競争原理で世界が動いているように見えるかもしれないが、その深層にある協同原理を知らないといけない。社会が協同するための必要な努力は必ず言語により達成される」

言語教育がどれだけ大事か、それも異国の人々に自国の言語を教える作業の困難さは並大抵ではない。「われわれは、言語に囲まれているが、そのことを意識していない。しかし言葉により思考は影響を受けるので、自分の意味論的環境に注意すべきである。言語の使用が不一致と衝突を作り激化させた場合には、話し手か聞き手か、その両方に欠陥がある」。「言葉で物事の本質を掴むには、常に批判的態度を忘れてはいけない」とも述べているハヤカワ博士の指摘を前に考えると、個人の争いはもとより、戦争と平和が交錯する国際政治の舞台を見ている「言語の使用が不一致と衝突を作り激化された場合には、話し手か聞き手か、その両方に欠陥がある」との指摘が重く響く。

◆「日本語の勉強を続けたい。もっと日本人と交流をしたい」の言葉を残し、 北方四島ロシア人一行は根室港から帰国の途に

「北方領土復帰期成同盟」による平成27年度の「第3回四島交流受入事業」の実施結果が公表されているが、9月5日に行われた「北方四島交流スピーチコンテスト2015」は、四島在住ロシア人一行が、日本語でスピーチを、札幌市内の大学でロシア語を学ぶ日本人学生がロシア語で、とそれぞれスピーチを行い、双方がお互いの学習の成果を披露・確認し合った。スピーチ後にはミニコンサートも開かれ、モスクワ国立音楽院留学経験のあるピアニストや札幌大谷大学で声楽を学ぶ学生、北海道大学マンドリンサークル「アウロラ」らが演奏を披露した。その後、茶話会形式でスピーチ参加者含め約61名の参加者が和気あいあいとして交流を深めたという。

この日本語習得事業をこれまでに5回、引き受けてきた対木学院長は「時の経過とともに難しさが増す北方四島の返還だが、友好と親善こそが大事な土台です。何といても日露両国は隣国同士であることには間違いありません。お互いに相手の立場に立って理解できるよう、大事なコミュニケーションツールである『コトバと文化体験』を通してお役に立てれば、こんなに嬉しいことはありません」とその意義を語った。

ロシア受講生一行は、事業終了時のアンケートに「もっと日本人と交流をしたい」「日本語の勉強を続けたい」「また来たい」といった評価する声を残して、当初の予定より、5日遅れて9月16日に根室港から帰国の途についた。